

I 学校の概要

思考力等育成モデル校事業 高松市立古高松小学校

◆児童数及び教員数

○児童数

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	特別支援	全校
3学級 78名	3学級 86名	3学級 77名	3学級 82名	3学級 103名	3学級 89名	4学級 17名	22学級 522名

○教員数 33名

◆学校の特色

本校の児童は、素直で明るく、読書が好きで読書活動に進んで参加するよさがある。また、お互いの個性を認め合い、相手の気持ちに共感し、寄り添える優しい心が育っている。異学年交流として、縦割り班活動を行い、ともに生きる温かい人間性や豊かな人権感覚を身に付けられるようにしたり、選択型放課後マイ・スタディや自主学習の推進により学力の向上を図ったりしてきた。また、コアラ隊活動として、挨拶運動や栽培・清掃活動にボランティアとして進んで参加したり、学級を解体し、共通の道徳的価値を高めるための交換道徳授業を行ったりするなど、感性を高めるとともに、協働する姿勢を育んできた。学校教育目標「豊かな心をもち、夢に向かってチャレンジし、たくましく生きる子どもの育成」のもと、一人一人の自尊感情を高め、どの児童もが、地域に根ざした学校へ行くことを楽しいと感じられるようにしていく。

II 研究主題等

研究主題

主体的に考え、学び合うことで、「学びのときめきと喜び」にあふれた古高っ子の育成
～ 自ら「問い」をもち、対話することで深い学びへとつながる学習活動の在り方 ～

◆研究主題設定の理由

児童が読書活動に進んで参加する理由として、読書をしたくなる活動や行事がたくさん仕掛けられていることが読書意欲につながっていると考えた。そこで、昨年度の研究では、児童が興味・関心・意欲をもてる授業づくりについて考えた。児童が学習の見通しをもてる手立てや学習意欲が高まる仕掛けのある授業を行うことができ、児童も学習の見通しをもつことができたことを実感する様子が見られた。しかし一方で、見通しや自分の考えをもつことはできても、考えを整理したり、言葉や文字で表現したりすることを苦手とする児童の姿が見られた。また、児童主導の自ら求める「対話」ではなく、教師主導の与えられた「対話」が見られた。

そこで、今年度は、児童が習得した知識・技能を活用したり、つなげたりする教師の手立てや支援方法などを研究することで指導力向上を目指すとともに、それに伴う児童の姿を見ることで、児童の思考力を深めたり、言葉や文字による表現力を高めていったりするようにする。また、児童の、相手の気持ちに共感し、寄り添える優しい心や、協働する姿勢を生かしながら、目的意識のある必然的な対話を通して、自分の考えを深めたり、再構成したり、新たな考えを見付けたりするなどの学び合いを目指したい。このように、児童が主体的に考え、対話を通して学び合うことで深い学びへとつながると考える。また、単元や題材を通して、思考力・表現力等を培うことで、教科における「見方・考え方」を働かせ、社会へとつながる深い学びを目指したい。さらに、自ら考え、友だちと学び合う中で児童が達成感や手応えなどを感じる「ときめきと喜び」にあふれ、学校へ行くことを楽しいと感じる古高っ子を育てたいと考える。

◆研究内容及び方法

1 単元や題材を通して自ら「問い」をもち、思考力・表現力等を育むための授業づくり

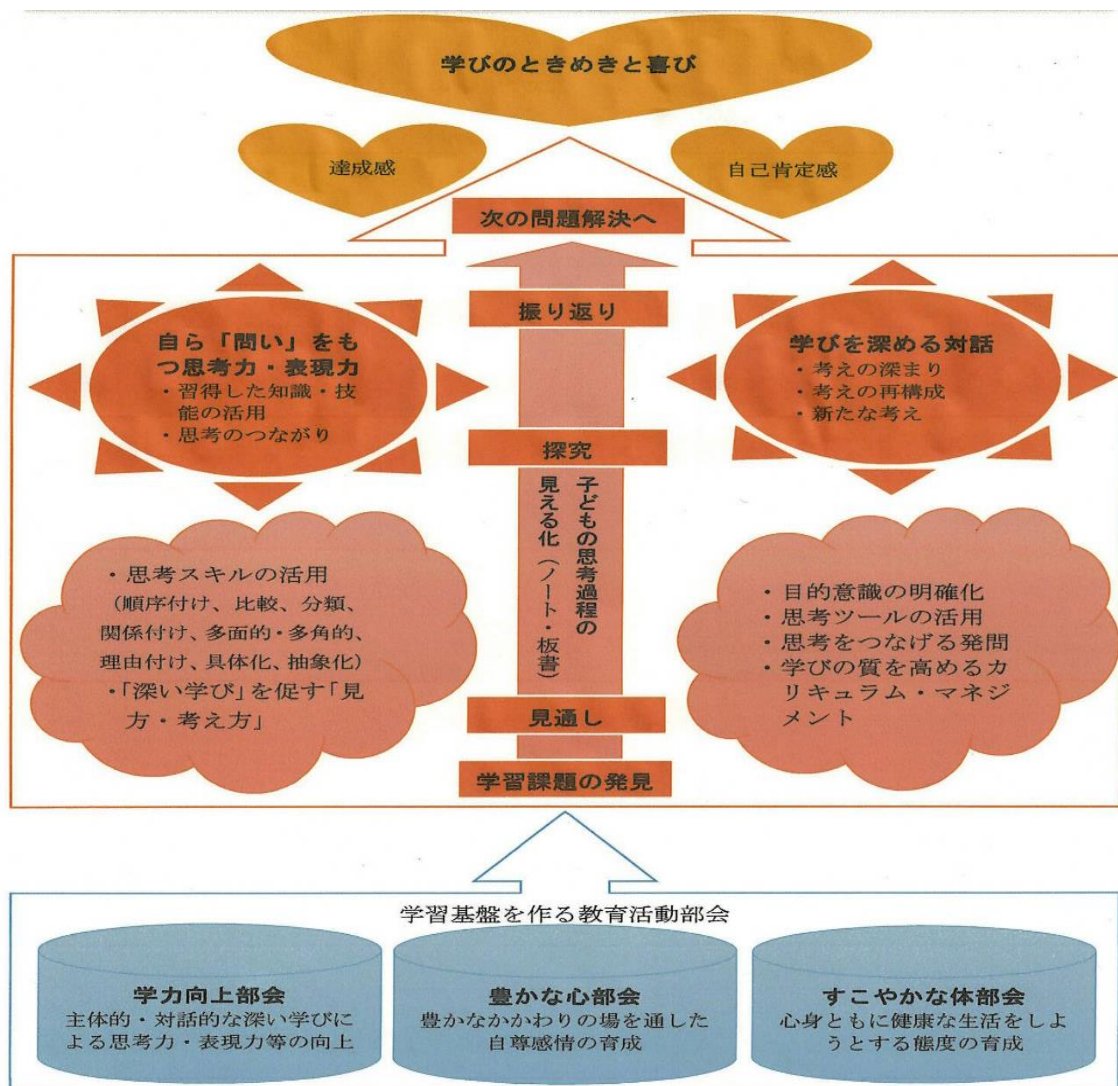
- (1) 児童がどの場面でどのように思考するのか、「問い→見通し→探究（個人・ペア・グループ）→振り返り→次の問題解決へ」の展開の工夫
- (2) 児童の思考の過程が見えるノートの工夫とノート作りの共有化

2 学びを深めるための対話づくり

- (1) 児童が目的意識や必然性のある対話を生み出す工夫
- (2) 児童が思考を整理したり、深めたりできる構造的な板書の工夫
- (3) 単元や本時のねらいを達成するために、児童がどのように考えたかを可視化し、思考の深まりを促す思考ツールの活用

3 教育活動部会による学習基盤づくり

- (1) 学力向上部会・・・【思考力・表現力等の育成】【マイ・スタディによる個の伸張】
【自分たちの未来を創るゆうかり学習】【読書活動の充実】
- (2) 豊かな心部会・・・【楽しい学校づくり】【美しい学校づくり】【心を耕す道徳教育の充実】
【ともに学び、ともに生きる特別支援教育】
- (3) すこやかな体部会・・・【健康教育の充実】【食育の推進】【基礎的な体力の育成・向上】



Ⅲ 研究実践

◆指標設定と達成に向けた取組

1 (児童質問紙) 授業では、ノートに自分の考えを書いていますか。

指標 「①している+②どちらかといえばしている」の合計



指標の達成に向けた実践

1 思考力・表現力等を育むための授業づくり

(1) 「問い→見通し→探究→振り返り→次の問題解決へ」の展開の工夫

① 自ら考えたくなる問いづくり(第3学年理科「風やゴムで動かそう」)

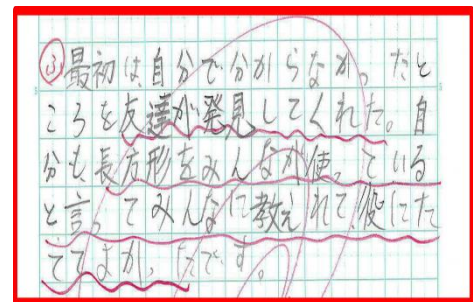
本実践では、「単元のゴールのイメージを児童に明確にもたせる」ことを意識した。そのために、本来であれば単元の最後にお楽しみで行うゴールインゲームを単元のはじめにも行った。まず、このゲームをした児童は、「ゴールに止めるのが難しい。」と発言した。このようなつまずきが、「ゴムを何cm伸ばせば、車が何m進むのか知りたい。」という課題探求の動機付けにつながった。単元終末のゴールインゲームでは、最初のゴールインゲームの時とは違って、ゴールに車を止める児童が続出した。その時、「ゴールに届かなかったから、次は、強く引っ張ってみよう。」「ゴールを過ぎたから、少し短くする必要があるのかな。」など、学んだ知識を使って試行錯誤する様子が見られた。また、「2回目のゴールインゲームの方が、勉強したことを使うことができ1回目より簡単だった。」「ゴムの長さや車の進む距離を考えることができたから、ゴールにたくさん止めることができた。」と、振り返る様子が見られた。単元の終わりには、単元を通して子どもの意識が途切れない問いを設定することで、ただ楽しいだけでなく、調べる必要感をもって実験に取り組むことができた。



ゴールインゲームを通して交流し合う児童の様子

② 自己の学びを実感する振り返り(第5学年算数科「面積」)

本実践では、振り返りの場面で、「児童が自己評価、相互評価、新たな課題に出会うことができること」を意識した。直角三角形の面積を求める際に、どの直角三角形も長方形をもとに面積を求めていることに気付いた児童が、グループの友だちにも長方形が今日の授業でのポイントだと伝え、まとめを作り上げた。自分たちで話し合っただけでなく、振り返りの場でも自分の考えが役に立ったと自己の学びの高まりを感じていた。(資料①)



資料① 児童の振り返り

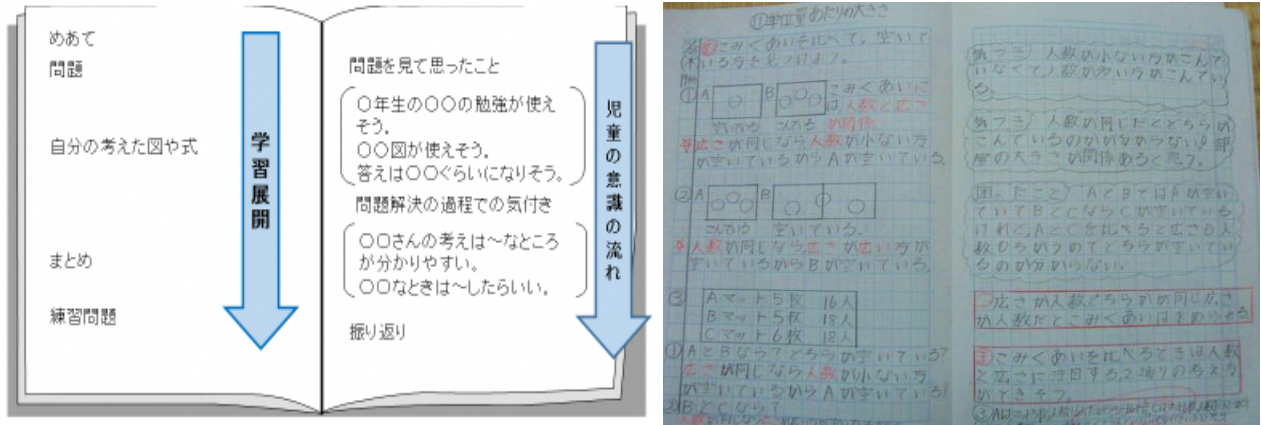
また、学びを価値付けられるよう、毎時間授業に沿った観点をいくつか教師が選んで示し、自己を振り返ってきた。(資料②) 振り返りの観点①は、基本的などの授業でも。観点②は特にグループや全体で交流をした時。観点③は単元の第1時のように新たな問題と出合った時。観点④は、前の学年や学習、前時との比較をする時など。観点⑤は、観点①と同様に基本的などの授業でも使え、単元の終わりでも取り入れることで、生活の場面でも生かしたいという振り返りが出てきた。

- ①新しく分かったことやできるようになったこと
- ②友だちの考えのよさや友だちから学んだこと
- ③学び合いでの自分のがんばり
- ④どのようにしたら発見できたのか
- ⑤次にやってみたいこと

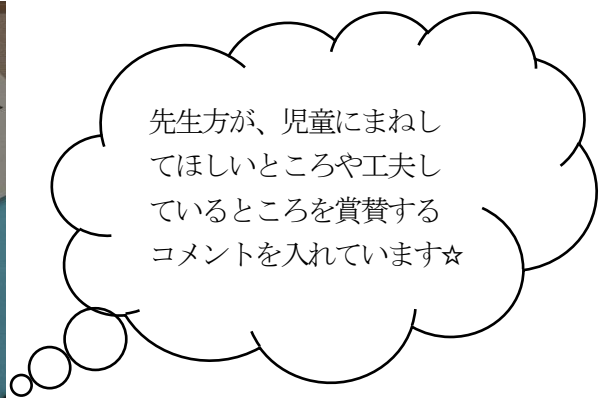
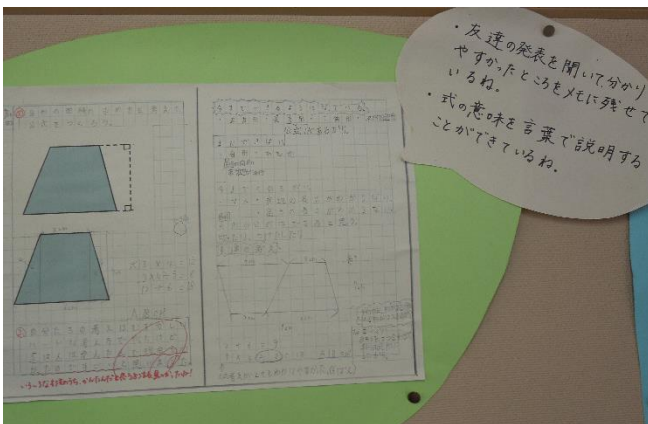
資料② 振り返りの観点

1 (2) 思考の過程が見えるノートづくり

ノートを使って自己の考えを表現する力を付けるために、学習ノートと自主勉強ノートの使い方を各学年ごとに統一した。ノートを見開きで使うようにし、左のページはめあてや問題などを書いていくようにした。右のページをメモ欄とし、授業中、いつでも自分が気付いたことや感じたことをメモとして残していくようにした。(資料③) ノートに自分の考えを残すことで、自己の考えを言葉や文字で表現する力が付いた。また、児童の学習ノート(国語や算数)を各クラスごとに掲示した。そうすることで、ノートに自分の考えを表現しようとする意欲や力が付いた。(資料④)



資料③ 算数科における学習ノートの使い方・児童の学習ノート



資料④ 児童の学習ノート・自主勉強ノートの掲示コーナー

2 (教員) 普通の授業で、児童生徒が話し合う活動を通して、考えを広げたり深めたりする機会を設けていますか。

指標 「①よく行っている」の合計



3 (児童質問紙) 学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを広げたり、深めたりすることができていますか。

指標 「①できている+②どちらかといえばできている」の合計



指標の達成に向けた実践

2 学びを深めるための対話づくり

(1) 目的意識や必然性のある対話 (第4学年社会科「自然災害からくらしを守る」)

本実践では、「対話の必要感を児童にもたせる」ことを意識した。単元の冒頭に、住んでいる地域で自然災害が起こったらどのように避難行動するかという仮想災害(災害が起こった時、どのように避難するかシミュレーションすること)を体験させた。児童が、「どこに逃げれば安全なのかな。」などと困り、「もっと自然災害のことを知りたい。」と感じられるようにした。そして、単元の終末に、もう一度仮想災害に挑戦するという単元計画を立てた。実際に災害が起きた時に、どのように行動すればよいか考える中で、児童は、実際にどのように対処をしていくか、対話し続けながら、自分たちなりの最適解を見つけていった。その際、自分と友だちの考えを比較しながらよりよい解を知りたいと思わせることで、目的意識をもたせた。



目的意識をもち、対話をする児童の様子

(2) 思考ツールを活用した板書 (第6学年道徳科「ロレンゾの友達」)

本実践では、「思考を可視化することで対話を深めること」を意識した。まず、考え、議論するために話し合う場面を焦点化した。もし、友人が罪を犯していたとしたら、自分なら「自首をすすめるか」、「逃がすか」の自己決定をさせた。次に、短冊にその理由を書き、思考したことを表現させた。座標軸を用いて、多様な考えを整理することで、自分の考えと他者の考えを比較できるようにして、一人一人の感じ方や考え方の違いに気付けるようにした。最後に、座標軸では、「自首をすすめるか」、「逃がすか」の二者択一だけではなく、中間の立場などの意見も受け止め、座標軸に示した。そうすることで、自分とは違う考えの理由を進んで聞こうとするなど、自然と対話が生まれた。更に、黒板に貼られた短冊を「自分中心の考えか」「友だちの立場に立った考えか」という新たな視点で考えさせることで、児童が視点に沿って話し合う姿が見られた。議論することを絞る＝「焦点化」、座標軸に考えを示す＝「視覚化」、児童の考えをコーディネート＝「深まり」を仕掛けることで、児童の学びの深まりが見られた。



座標軸で児童の考えや立場を可視化

◆特徴的な取組

1 思考スキルを活用した思考力 UP タイム

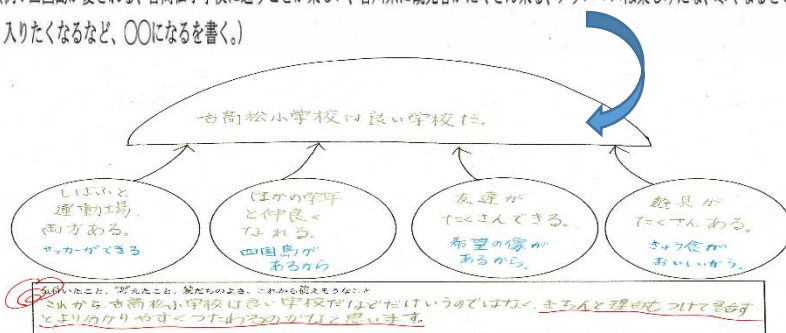
第1・第3火曜日の朝の時間を思考力 UP タイムとして、思考スキルを使って児童の思考力・表現力を高める活動を行った。まず、教師が問題（資料⑤）を出し、「比較」「分類」「関連付け」「理由付け」などの思考スキルを使って、問題について考えを分析・整理させた。その際、図を使って思考したことを可視化できるようにした。（資料⑥）次に、整理したことを友だちと交流し合い、相違点を見付けたり、まとめたりさせた。そうすることで、新たな考え方や自己の考え方の変容に気付いたり、友だちの良さや学ぶ楽しさを実感したりする様子が見られた。（資料⑦）このような活動により、図画工作の鑑賞会など、他教科でも思考スキルを使って、思考を整理する姿が見られた。

① クラゲチャートの書き方を説明する。（2分）

- ・主張に対してなぜそれが言えるのか理由を考える＝クラゲチャートを使う。
- ・真ん中の頭（△）の中に主張を書く。

資料⑤

（例：四国島が愛される、古高松小学校に通うことが楽しい、香川県に観光客がたくさん来る、クリスマスは楽しみだな、寒くなるとこたつに入りたくなるなど、〇〇になるを書く。）



資料⑦ 思考力 UP タイムで交流し合う児童の様子

資料⑥ クラゲチャートを使ったワークシート

2 自ら学びに向かう意欲を高める放課後マイ・スタディ

6月、11月、2月の週2日程、希望者を募って、放課後の自主学習を実施した。教員が分からないところを丁寧に教える補習コースと自分でできる学習を考え、どんどん学ぶ自主学習コースがあり、みんなが集中して取り組んでいる雰囲気が学習意欲を高めている。参加した児童には、また次も参加したいと好評であった。



補習コース



自主勉強コース

3 読書意欲を高める工夫

① あじさいリーディング月間

あじさいリーディング月間の「あじさい満開大作戦」では、本を借りると図書委員やボランティアが折り紙で折ったあじさいのパーツがもらえる。もらった自分のクラスのあじさい掲示板に貼り、あじさいの花を満開にしていこう。目に見える掲示物をクラスで協力して作成し完成していくことで、たくさん本を読もうとする意欲の高まりや達成感を味わうことができた。



「あじさい満開大作戦」

② お話ミックスジュース

くじで、どの先生がどのクラスを担当するかを決めて、朝の時間を使って全校一斉で先生方による本の読み聞かせを行った。担当する先生のお気に入りの本や、図書館指導員がすすめる、学年に合った本を用いた。担任以外の先生が本を読んでくれることもあり、興味津々に話を聞く姿が見られた。



IV 研究の成果と課題

1 成果

(1) 昨年度と今年度の県学習状況調査を比較すると、国語科の読む能力は+0.56ポイント、書く能力は+7.47ポイント、話す・聞く能力は+2.45ポイント、算数科の数学的な考え方は+2.64ポイントの上昇が見られた。思考力に関わる観点の数値が上昇していることが分かる。

これらの成果は、児童が主体的に学び合えるように、「見通し」「対話」「振り返り」の3つを大切に授業づくりを行ったことと関連している。県学習状況調査の結果を見ると、「見通し」

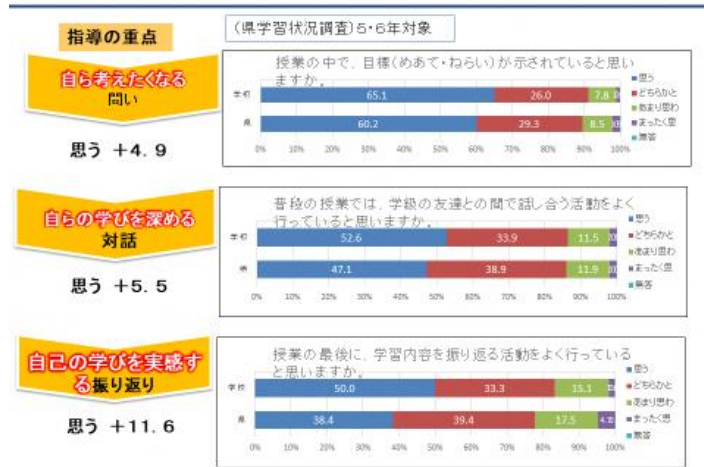
「対話」「振り返り」を「していると思う」と答えた児童が多いことが分かる。「見通し」では、児童が「問い」をもち、自ら考える姿を見ることができた。「対話」では、児童の話し合いたいという意欲を高め、積極的に対話する姿につながった。「振り返り」では、ノート指導を通して、自分の考えをもったり、整理したりする姿を見ることができた。これらの指導や支援が学力の向上につながったと考える。

(2) 8本の校内研究授業（国語2本、算数2本、社会、理科、道徳2本）と1人1本の公開授業を行った。校内研究授業の討議会では、「思考力・表現力等を高める工夫」「主体的・対話的で深い学び」「教科における見方・考え方の3観点に絞り、成果と課題・改善策をマトリクス法で整理した。これらの成果や課題を全体討議で共通理解し、次の授業へとつなげながら研究の高まりを目指したことで、教員の意識の変化や指導力向上につながった。校内研究授業では、授業をする上で、児童の思考をみとり、支援するための思考スキルの具体化（順序付け、比較、分類、要約、関係付け、関連付け、多面的・多角的、理由付け、具体化、抽象化、焦点化など）や児童同士の思考をつなげる教師の発問の工夫を行うことができた。

2 課題

(1) さらに学びの深化に向けて、対話の目的（対話することを焦点化して、何が分かればよいのか、何ができればよいのか、など）や対話の視点（自他の考えを吟味したり、精査したりする視点を共有できているか）を教師だけでなく、児童一人一人が意識できるようにすることが必要である。

(2) 児童自身がどのように思考を働かせるかよいのか理解できるように思考スキル（比較・関連付け・分類・整理）を提示したり、言語活動（また、さらに、なぜ、など）が充実するよう、可視化の工夫を行うなどして、より一層思考を深めていけるよう研究していきたい。



付箋紙を使って、成果や課題をマトリクス法で整理したもの